4節 聖書の権威

4. 聖書が信じられ、従われるべき、その根拠となる聖書の権威は、いかなる 人間や教会の証言にも依拠せず、(真理そのものであられる) その著者である神 に、全く依拠している。そしてそれゆえ、聖書は、神の言葉であるという理由 で受け入れられなければならない。

「こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。 夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。・・・・なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神の言葉を語ったものだからです。」

ペテロの手紙 二 1・19,21

※カルヴァンは、この証拠聖句を、ペテロが旧約の預言者も御霊に導かれて語ったとして次のように言う。「もし我々が神の御霊によって益と実りを得たいと願うならば、聖書を読み、聖書に聞くことに熱心に精進しなければならない。(このことは福音の光が現れて後、場所を譲って退いたと見られもした預言者の教えに、なお注意を払っている人々の努力をペテロが称賛しているとおりである(IIペテロ1・19))。・・・・・御霊が最も確実な目印によって識別させたもうのでなければ、聖書は我々に対しどうして権威を持ち得るであろうか」(綱要)1-9-2。

「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのた

テモテへの手紙 第二3・16

「わたしたちが人の証しを受け入れるのであれば、神の証しは更にまさっています。神が御子についてなさった証し、これが神の証しだからです。」 (典)

ヨハネの手紙 - 5・9

「わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなた方の中に現に働いているものです。」

テサロニケ信徒への手紙 -2・13

※岡田稔先生の(解説)では、聖書の権威をわたしたちがどのようにして認めるかがこの節の主題であるとして、結局人間の理性や経験によって判定することでは不可能としている。

「聖書が、信仰と生活の規準である、と告白することは、聖書は信ずべき、また、服従すべきものであると告白することである。この両面(信仰と生活)に及ぶ聖書の人生にかかわる働き(すなわち、聖書の効用)は、それが神の霊感によって与えられたという聖書の権威に基づいている事柄である。

本節は、この権威をわたしたちが認容する手段についての告白である。一つの命題を真なりと承服する場合、わたしたちは理性や経験によってこれを自ら判定する。しかし、聖書の権威と言うような大問題になると、人間であるわたしたちには不可能である。

(中略)

最初に聖書を受け取った人々の証言といえども、それが神の言葉・霊感による文書であるとの確信をどのようにしてえたかということになれば、その本人の理性とか経験による判定というだけでは不十分である。結局、聖書の権威はその真の出所である神以外に依拠できない神の言葉と言うことだけが、聖書の権威の頼り所なのである。」(解説)

また、矢内昭二先生の(講解)では、この節は、聖書の権威が何に基づく かどのような性質の権威かを明瞭に語っているとしている。

「聖書の権威は、人間の経験や教会会議の決定に依存しているのではなく、 聖書の著者である神の権威のゆえに服従されねばならないのであるということ。・・・・・聖書は、ルカなり、パウロなり人間が書いた著作であるのに、 それが神的権威を持ち、信仰と生活の誤りのない規準でありうるのは、聖書の究極的作者は神ご自身であり、神は、聖霊により聖書の著者たちを霊感し、 その著者たちの性格、才能、能力を十分に用いつつ、しかも同時に啓示の真理を誤りなく書き記すことができるよう一切の誤謬から守りたもうたのです。」(講解)

さらに、ウィルキンソンの(註解)では、当時のローマ・カトリックの聖 書論の誤りにも言及している。

「霊的な事柄における最終的権威という問題全体を、信仰告白は取り上げ、 そのような権威は《神の言葉》としての聖書に内在しているものであって、 外在的なもの、すなわち、『人間や教会』によって付与されるようなものでな い、ということを主張したいのである。

『教会』について言及しているのは、疑いもなく、当時のカトリック教会の主張を念頭においてのことである。カトリックの神学者たちは、教会が正典を確立したのだから聖書はその権威を教会の証言に負う、と教えていた。」

(註解)

ところで、カルヴァンは、聖書の権威についてどのように言っているのだろうか。

「我々の心を聖書への尊敬に備えさせるためだけでなく、一切の疑念を取り除くために、聖書の権威に関する幾つかの注意をここに挿入する必要がある。更にまた、これが神の語り掛けであると示され、それが疑いないものとして受け入れられるならば、人間としての共通感覚や、人間らしさを失った者でさえなければ、そのように語りたもうた御方に対する信頼を敢えて拒絶するほど悲劇的な図太さに身を委ねることはできないであろう。ところが、神は毎日天から託宣をくだしたもうわけではなく、我々には書かれた聖書があるだけである。主は御自身の真理がこれによって永久に記憶に留められるよう聖別されることを良しとしたもうた。それ故、神御自身の生ける御声がそこで聞かれるために天から注がれたと確信されるものでないならば、これは信仰者に対して十分な権威を要求することはできない。」(綱要)1-7-1